『比較民俗研究』10. 1994／9

漆工職祖神と虚空蔵菩薩
―秦氏および木地屋との関係を中心にして―

佐野　賢治※

前　言

特殊な技術が特定の集団により維持される社会では，その技術が神秘化され，ある一つの職能集団はそれ自身，特殊な信仰を持つ宗教集団の様相を帯びていた。職人という言葉は，十二，三世紀以降，漁民，狩猟民，手工業者，商人，芸能民，呪術師などの非農民に対して使われてきたが，職能集団とされる木地屋や山師は，加えて漂泊の徒でもあった。彼等はその職祖をそれぞれ惟喬親王，聖徳太子の貴種に求めた。従来，これらは技術の伝授とその認可の証しとして漂泊の徒がおのれ自身の精神的拠り所として，稲作定住民に対するコンプレックスの補償作用の上に成立してきた伝承と考えられてきた。

しかし，今日，大工，左官，石工の人々が聖徳太子を守護神として太子講を結成し，年に何度か参集し，飲食を共にしても寄合や慰労の意味合いの方が強く，職能神に対する祭りといえるのか疑問である。職能集団の祭りが職能祖神や技術守護神に対する感謝の念に基づくとするとまず第一にその関係が問題になる。

酒造家の三輪明神（神酒を意味するミワから），染屋の愛染明王など語呂合わせ的対象神仏もある。一方，同じ職祖伝承でも西日本では天皇家に縁故を求める傾向があり，東国では甲斐の大鋸杣人をはじめ，『河原巻物』の弾左衛門の由緒まで，源頼朝などの武家に由来を求めるなどの差がある(1)。北越後，佐渡でタイシと呼ばれた人々が実は金掘りを中心とする山民であり，南北朝から室町期にかけ浄土真宗弘通の主役となっていた事実など(2)，その特殊技能ゆえに聖別されていた状況が判明しつつある。

また，谷川健一は風祭りのもつ意味の相違から金属神→農耕神への移行を古代鍛冶集団の足跡から実証し，天目一箇命などの鍛冶神が，柳田国男のいう神性の目印としての目一つではなく，職業病に由来する鍛冶師の単眼隻脚の反映であると指摘している(3)。このように，稲作定住民に対する非稲作漂泊民サイドに視点を据えることにより，祭神と職能集団との関係が鮮明になってくる。ここでは，漆工職人と虚空蔵信仰の関係について述べるが，鉱山師と虚空蔵信仰も深く関連していることは別稿で述べて見たい。

一　塗物師・漆工職人の虚空蔵信仰

漆工職人が虚空蔵菩薩を漆器工業の祖神として虚空蔵寺堂の縁日十三日に参詣したり，虚空蔵講を結成している例が見られる。しかし，漆掻きの人々の間には特別に虚空蔵菩薩に対する信仰

※筑波大学歴史・人類学系助教授

はなく，塗師・漆器商人の間の信仰が主である。

［事例１］法輪寺（京都市右京区嵐山中尾下町）

一名，「うるし寺」とも通称され，京都近在，金沢，石川県輪島地方の塗師の信仰を集めている。山門には『日本漆器祖先　虚空蔵菩薩』とあり，文徳天皇第一皇子惟喬親王が日本における漆器製造の技術が完全でないのを慨嘆され，参籠したところ夢に高僧が現れ，漆下地，研出法その他を伝授したという。十一月十三日の縁日は“漆の日”，“漆祭り”，“お火焚祭り”といい，惟喬親王に対する報恩講を営む。また，虚空蔵菩薩の霊験と名工，左甚五郎の奇瑞を伝え(4)，諸工芸の守護神となっている。（歌屋大東『日本漆祖漆器守護神の由緒』）

［事例２］香集寺（静岡県焼津市当目）

静岡市内の塗下駄組合の信仰がある。

［事例３］明星輪寺（岐阜県大垣市赤坂町）

虚空蔵さまは“漆の仏”ともされ，信仰すれば漆にかぶれないという。岐阜市を中心に輪島方面からも参拝がある。

［事例４］金剛証寺（三重県伊勢市朝熊山）

桑名市の仏具屋を中心に信仰がある。

［事例５］虚空蔵寺（福井県福井市足羽山）

寛永６年（1629），慶松五右衛門の持仏堂として建立された寺で，“芸術の神様”と通称され，福井市内の漆塗師の信仰を集めている。堂内には多数の鯰の絵馬が奉納されている。

［事例６］宋雲院（東京都台東区東上野）

この寺は柳河藩主橘宗茂により，寛永12年（1635）に建立され，広徳寺の塔頭になっていた。本尊の虚空蔵菩薩は明治元年の伊勢朝熊山金剛証寺の出開帳を縁に安置された。

『金剛証寺出張所』の名もあり，明治30年頃までは万金丹の製造・販売も行っていた。

本尊はその後，関東大震災のときに焼失した。東京履物主組合，東京漆塗組合を中心とする漆工職関係の人々で虚空蔵講が結成されており，正月，五月，九月の十三日に大般若転読会を中心とした講会が開かれ，年に一度虚空蔵関係寺堂を巡礼する。十一月十三日は漆祖虚空蔵菩薩奉賛式といい，日本漆工協会の会合が当寺で開催される。門前である上野下谷一帯は仏壇・仏具屋が軒を連ねている。

［事例７］国造神社（石川県金沢市泉町）

前田利家が京都法輪寺より勧請した虚空蔵菩薩を祀り，虚空蔵之宮とも称した。天平勝宝三年の創建と伝えられるが，歴代の大聖寺藩主の崇敬があつく，木地挽の隆盛などを祈願するために家臣を代参させたという。金沢の塗師の信仰を集め明治時代まで，毎年十二月十三日を“イリコ祭り”といい，塗師の人々は祭典の終了後，イリコを頂き，下塗りに混ぜて使用した。イリコは麦を煎り，粉末にしたもので木の目などに塗り込めた。

その由来は，ある年の十二月十三日，泉村の農家に貧しい老爺が一夜の宿を求めた。家人が囲炉裏端に迎え，イリコを炒って与えようとすると老爺はたちまち，虚空蔵菩薩に変身したので，

以後，村人はこの日にイリコを作って国造神社に参詣したという。

金沢市内の宝幢寺（幸町），千手院（野町，いずれも真言宗），蓮華寺（東山，日蓮宗）は虚空蔵菩薩を祀る寺だが，特に蓮華寺の五月十三日の縁日は明治の中頃まで，万歳が出るほど賑やかで五百人をこえる塗師が参詣したという。神明宮（別当，野町雨宝院）も塗師の信仰があり，十一月十三日にはコクソ祭が行われていたという(5)。

［事例８］虚空蔵堂　（滋賀県長浜市知善院境内）

浜仏壇製造に関係する木地師，塗師，蒔絵師などの職人，販売に関わる仏具屋の同業者組合である浜仏壇工芸会の人々により，祀られている。祭日は春が三月十五日，秋が十一月十五日で，亡くなった会員の供養をし，その後一同で会食する。本尊は明治の中頃，現在の浜仏壇隆盛の元を作った宮川政太郎らにより，京都の法輪寺から勧請されたものである(6)。

その他，漆工職人に信仰がある虚空蔵寺堂祠に豊福寺（和歌山県那賀郡岩出町根来），虚空蔵堂（石川県江沼郡山中町東山神社“木の宮”境内），輪島漆器組合が祀る虚空蔵菩薩（旧重蔵権現社安置）がある。いずれも，漆器工業が盛んな地方であることがわかる。

このように漆工職人の間には虚空蔵信仰が見られるものの，漆掻きの人々の間には虚空蔵菩薩を信仰することは伝わっていない。漆の木を求めて移動し，コロシガキといわれるような漆採取をする人々の間に，特別な信仰が報告されていないのは気にかかる。下の表は明治期における漆掻きの各県別表であるが，福井県が圧倒的に多く，次いで新潟県である。当時，国産漆の半分を産出した越前の“漆かきさん”は漆掻きの出稼ぎから帰るとふたたび，越前鎌の行商に出た。越前鎌の名声はその品質だけでなく彼等の行商力にもよったのである(7)。また，新潟県内の漆掻きの中心地は岩船郡，村上市周辺である。中でも朝日村猿沢～塩野町付近は盛んで，猿沢には戦前まで十数名の漆掻きの人がいた。

漆掻き出稼者各県別表

福井	1560人	愛媛	21人	高知	11人	栃木	1人
新潟	102	徳島	20	宮城	8	岩手	1
石川	85	岡山	15	秋田	7	鳥取	1
京都	37	奈良	13	東京	1	計	1883人

（農商務省山林局編『地方に於ける漆樹及漆液に関する状況』明治41.6）

この村では虚空蔵堂（別当大照寺）が鎮守として村人に意識されているが，本尊の虚空蔵菩薩が栃の木でできているために，栃の木を薪として使わないなどの禁忌はあるものの，特に漆掻きとの関連はいわない。また，山形県鶴岡市田川の虚空蔵山は漆の自生する山で，漆掻きは別当の南光院に漆年貢を納めていた。ここでも，虚空蔵菩薩を信仰するということはなく，榧を虚空蔵

様が嫌うため，榧の実は食さないという。漆掻きは農民の出稼ぎという業態を取るために，職業信仰が発達しなかったと考えられる。

これとは対照的に漆塗師は，一所に定住することなく轆轤を用いて椀などの挽物づくりを生業とした木地屋に深く関係する。木地屋は「諸国入山随意，諸役免除」のお墨付き，いわゆる木地屋文書を所持していたが，そのうちの一つ，元亀３年（1572）正親町天皇下賜の綸旨には文徳天皇の第一皇子惟喬親王が轆轤師・塗物師・杓子師・引物師の職祖として記されている(8)。

このように木地屋と漆工職が不可分の関係にあったことは，福井県旧河和田村（現，鯖江市）の片山は片山椀で知られていたが，村の氏神には木地屋文書が保存され，木地屋の村でもあったことがわかるし(9)，大正初期からは“秀衡塗”で知られ，昭和39年のダム建設で消滅した岩手県胆沢郡旧衣川村増沢の“増沢塗”は伊達時代から漆器師沓沢氏，木地師小椋氏によってその元が始められたという。明治貳年の銘がある石碑（実際の建立は大正11年，明治２年に旧姓を改めた。明治維新における木地屋の対応の一端を偲ばせる）には，

明治貳年	漆器開業者	佐々木辰十郎	漆器師	沓沢岩松
	漆器師	佐々木与茂吉	木地師秋田県	小関貞吉
	木地師	佐々木新吉	木地師	佐々木丑松
	木地師	佐々木善左エ門	木地師	高橋徳之丞
	木地師	小椋房吉	木地師	岩島松太郎

とあり，漆器師と木地師の協力のもと，“増沢塗”が開業されたことが示されている(10)。木地屋研究の第一人者，橋本鉄男は秋田県雄勝郡稲川町の「川連塗」の下請けの木地作業所の柱に，京都法輪寺の“漆祖漆器商工業守護神祈収”の札が貼付されていることを糸口にして，近江日野谷の木地職＝塗師屋の小野宮信仰と諸国の木地職＝塗師屋の虚空蔵信仰の関連を求めている。木地屋と漆工職人がともに職祖とする小野宮惟喬親王と虚空蔵信仰の結節点である京都法輪寺の存在がここで，大きな意味を持つことになる。まず，惟喬親王の方であるが，滋賀県蒲生郡日野町大窪の井上伝八家旧蔵文書に，親王が小椋谷でのドングリの袴から木地物を発想し，法華経の巻物から轆轤を発明し領民にその技術を伝授するのに続き，日野谷に来られて，猿冶郎柿のなっているの見て，椀の下地に柿渋を杉・檜の炭と合わせ塗ることを教えたとあり，木地屋小椋谷根元地説になぞられた日野谷塗師屋根元地説をとく文書だとその意義を論じている(11)。

このように木地屋と塗物師が深く関係している一方，社会経済の進展により，木地屋という一次的な産業から，漆器という付加価値のある商品を生産・販売する業態への転換があった。それに伴う産業構造，職業意識の変化を塗物師の村として有名な下蚊屋（鳥取県日野郡江府町）の事例をもとに鈴木岩弓は論じ，かつて塗物師をしていた家々では毎年12月の中旬に“ヌシヤママツリ”と称して惟喬親王の掛軸に甘酒を供えて家族で祀り，また甘酒を近所に配った行事を紹介している(12)。また，木地師の実態を『氏子狩帳』の分析から精査した杉本壽によれば木地職の衰退と塗物師への転換は江戸時代の初期，元和年間にはすでに認められるとしている(13)。

次に『日本漆器祖先　虚空蔵菩薩』の寺，法輪寺だが，この寺の開創の道昌律師は法輪寺開創

よりも，和銅６年（723）行基創建の葛井寺のあとに太秦の広隆寺（秦河勝の建立）を中興した祖としての方が有名である。虚空蔵信仰が我が国に伝流するにあたっては，九州宇佐八幡神宮寺としての虚空蔵寺など，新羅系仏教の移入にともない，秦氏の活躍があったことは，道昌に至るまでの勤操・護命など秦氏出身の僧が虚空蔵求聞持法を深く修したことでもわかる。有名な弥勒菩薩半跏思惟像はじめ広隆寺における新羅仏教的要素の強い理由を仏教興隆をめぐる飛鳥＝百済仏教→蘇我氏・漢氏連合に対抗する白鳳＝新羅仏教→聖徳太子・秦河勝の新興勢力の結成に由来すると平野邦雄は説いている(14)。

いずれにしろ，日本に養蚕・機織，染色工芸，採鉱，鍛冶などの殖産技術をもたらした秦氏が虚空蔵信仰に関わりがあるのは興味深い。とともに大工の人々を初め職業祖神として崇敬される聖徳太子が深く秦氏と関わっていたことは，太子の死後，“天寿国繡帳”の制作監督をした椋部秦久麻の事蹟も含めて注意が喚起されるのである。

二　秦氏と木地屋

小野宮惟喬親王を職祖にする木地屋は近江の小椋谷（滋賀県神崎郡永源寺町←旧愛知郡東小椋村）を本貫地とするが，この地では集落を君ヵ畑など何々畑と称したり，また，山棲みの人々のことを“ハトサン”と呼び慣わし，それは焼畑との関係も考えられるが“秦”氏に由来するという(15)。旧愛知郡は秦氏の居住地で正倉院文書，東大寺文書の田券，解文など奈良及び平安初期の記録には，依智秦公を主として秦氏十二流の姓名が細かに記されている。（依智秦公71人，依知秦30人，依知３人，秦公６人，秦人４人，秦前１人，秦３人，秦忌寸３人，依知秦前公２人，大蔵秦公２人，抗右秦公１人，秦眞１人）(16)愛知郡の郡長は秦氏であり，９世紀までは近江国愛知郡はいわば秦王国であったいえる。

秦氏は秦始皇帝の末裔と名乗る弓月君が百二十県の百姓を従え，応神朝に新羅・加羅方面から来朝し，その本拠を鴨川と桂川に挟まれた山城の葛野に置き京都盆地を開発した。「ハタ」は新羅語で「海」を意味し，朝鮮からの外来人を指していたのが後に氏族名になったとされる(17)。秦氏については近年，大和岩雄の『秦氏の研究』（1993　大和書房）により日本の殖産，芸能，信仰，技術，学芸に与えた秦氏の足跡・影響が全体的に示されるようになってきたが，秦氏研究に先鞭をつけた平野邦雄によれば辰韓（新羅）の遺民であり，先来の渡来氏族である秦氏は一般的に中央政界に進出せず，在地土豪的な性格を堅持し，氏族の共同体的組織を温存し，固有の技術を同一氏族内によく伝習，伝播した殖産氏族であったと漢氏との対照の上で結論づけている(18)。

さらに氏は秦氏の職掌について『日本書紀』雄略紀や『新撰姓氏録』にある秦酒君が配下を率いて「蚕織絹」，「調庸」，「調庸絹」の生産貢進を行ったので諸国に貢調が満ち，朝廷は「大蔵」を構え，秦酒君をその長官にしたとの記事を引いて，大蔵が秦氏の主な職掌であると論じ，加えて，正史の分析から大蔵，内蔵の下級官人が秦氏に一般的な職務であったとした(19)。秦氏が古代国家の財政の二大機関，大蔵・内蔵のうちの大蔵に深く関与した氏族であり，蘇我氏が倭漢氏を配下にして内蔵の実権を握ったのに対し，聖徳太子は秦氏を利用して大蔵の実権を握ろうとし

たとの説もあり(20)，秦大蔵のウジを持つ者が史料には実際何人か見え，先述した近江の愛知郡にも大蔵秦公，秦大蔵忌寸がおり，秦氏＝大蔵という結び付きは一般的であったと思われる。また，秦氏の配下には木工の専門集団である応神朝に新羅王から献じられた新羅系帰化人の猪名部がおり（『日本書紀』応神天皇31年８月条），大宝令後も木工寮に出仕していた。造東大寺司の木工として秦九月，秦小鯨，秦広津，秦倉人砦主，秦姓綱麻呂，秦都伎麻呂など秦氏の名が見え東大寺，興福寺などの造営に活躍した(21)。このような中，近江国愛知郡には東大寺に関係する山作所が奈良時代には置かれ，依知秦氏などの渡来系技術者が蝟集すると共に，近江の「轆轤工」として東大寺工房に上番した様工がおり，後に山作所が東大寺の荘園化すると彼等は「轆轤師」と呼ばれるようになり，一部は荘園に残り，多くは他国に漂泊移動して生業の地を求めた。これが，近世以後「木地屋」と呼ばれる人々との起源であると橋本鉄男は論じている(22)。

木地屋特有の姓である小椋・小倉・大蔵・大倉については従来，小暗い所，小高い所，磐座，鉱床を指す地名，小野惟喬親王の家来，太政大臣小椋実秀の子孫であることからとか，高句麗・高麗を朝鮮語でコクルという説などが唱えられているが，秦氏とその職掌，「大蔵」との関係もまた一考を要するであろう(23)。

いずれにせよ，支配勢力の周辺にあり，強固な氏族結合を崩さず殖産・技術を持って各地に展開し，宇佐八幡，松尾神社（秦忌寸都理の勧請），伏見稲荷（秦忌寸伊呂具の勧請）など帰化氏族としては不可解なほど日本の神祇信仰に密着している秦氏の以上の性格は後代まで影響し，栃木県に多く分布する星宮神社の祭神や渡来人との関係をはじめ，養蚕や機織，鉱山技術，防水築提などと関わる伝承の形成に影を落としているのである。

三　猿丸伝説と小野氏

奥山に　紅葉踏み分け　鳴く鹿の　声聞く時ぞ　秋は悲しき

猿丸　太夫

その昔，藤原高光が虚空蔵菩薩の加護により，瓢ヶ岳の妖魔を退治しその折りに建立したとされる岐阜県高賀山諸社の一つ，那比新宮（郡上郡八幡町那比）の社前の山田家には猿丸太夫の生家との伝承が現在まで語り伝えられ，奥山に…の歌は母との生別の悲しみを歌ったものだといわれる(24)。この話は分家筋の武儀郡洞戸村小倉，郡上郡美並村粥川の山田家にも家伝として伝わり，美濃市乙狩にも同様な話が伝わっているように高賀山信仰の性格の一面を示している。

『郡上郡史』（大正15年刊）の記載によると，

彼ノ平安時代ノ歌人ナリシト称セラル猿丸太夫ハ伝フル一説ニ依レバ摂津ノ国ノ人ナリトカ，又ハ聖徳太子ノ御孫弓削王ノ別名ナリトカ極メテ曖昧タル所アリ其出生地ハ那比新宮，山田小右衛門（現今戸主山田末吉）ナリトノ一伝アリ，確ナル証拠トテハ無ケレ共言ヒ伝ヘニ依レバ天暦ノ昔藤原高光公高賀山妖鬼退治ノ後新宮山田小右衛門方ニ滞在中其家ノ娘某（或ハ名おあき）高光公ノ胤ヲ宿シ其出生セシ子が即チ猿丸太夫ナリト，而シテソノ後京都ニ上リタリ

とあり，漠然とした話であるが，現にその末裔の山田家に伝わると記している。

高賀山麓では雉がケンケン鳴きをしないなど雉（＝木地屋）に関する伝承がさまざま伝わっており，『高賀山星宮粥川寺由来記全』（元禄6,1692年）の分析から藤原高光の三分家の一つと称する粥川氏によって高光伝承が持ち伝えられたこと，天暦７年（953）銘の大般若経の奥書などから，小林一蓁は藤原高光伝説は轆轤師（木地師）が伝えたもので，このような脈絡の中で，三十六歌仙の一人，多武峯少将藤原高光が生み出されたとしている(25)。藤原高光を美濃介藤原高房（755～826，『文徳実録』）と実在の人物に比定する見解もあるが(26)，高光や猿丸太夫は『神道集』（安居院作，14世紀中頃）の「上野国勢多郡鎮守赤城大明神」「上野国第三宮伊香保大明神事」にも登場し，縁起説話中の架空の人物と見るほうが相応しく，それ故，その伝播者が問題となってくる(27)。

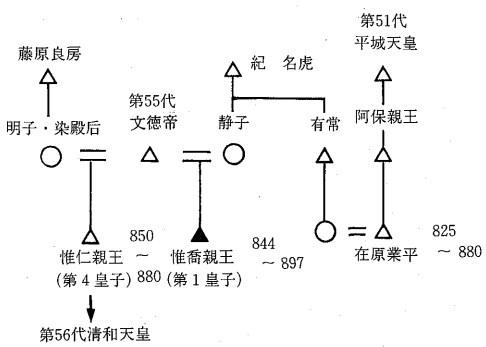
猿丸太夫の伝承は各地に伝わるが，若狭の杣山神社の神主としての猿丸太夫が阿波の鳴門を鎮める歌を和泉式部に教えた所，先を越され渦潮をおさめられてしまった，そこで

はるばると阿波の鳴門をとめにきてよまむと帰る杣山のねぎ

と，猿丸太夫が杣人であることを如実に反映した歌もあった(28)。

柳田国男は『妹の力』のなかで小野の猿丸太夫の話は，近江の小野氏の伝えたもので，近江の木地師との関係は無視できぬと指摘している。近江の小野氏とは湖西の和邇郷を本拠（小野－滋賀県滋賀郡滋賀町）とした海人族和邇氏の分かれであり，杓子，瓢を水神との関係で祀る一方，「斧神」として狩猟・木工・薪炭・採鉱冶金を業とする一団で，後に日吉山（比叡山）に依拠する天鈿女，猿田彦の末裔とされる猿女君氏と合流し，猿女小野氏を名乗るようになり，やがては猿女君氏側の衰えで，小野氏となり，小野神を奉じる神人として諸国に歌物語を伝えた一団を指している(29)。

さて，木地屋の職祖とされる小野宮惟喬親王の名は洛北大原の小野郷に隠棲したことに由来するという。文徳帝の第一皇子であり，当然，皇位継承者であったものが，生母が紀氏出身の女官である惟喬親王を差し置いて，権勢盛んな藤原氏出身の皇后を生母とする第四皇子の惟仁親王が即位し，第56代清和天皇となる。（下図参照）大江匡房の『江談抄』によると，この皇位継承をめぐっては惟喬親王側には紀僧正真済（柿本紀僧正，高雄僧正とも）が，惟仁親王側には真雅僧都が加勢したという。空海の高弟，真済は紀氏出身の僧で後に和気氏の氏寺である神護寺の別当となり，虚空蔵菩薩像を神護寺に安置している。



惟喬親王をめぐる人間関係

ここで，失意の内に出家した惟喬親王を小野山に訪ねた在原業平との交遊ぶりが『古今集』『伊勢物語』から偲ばれる。ともにその母・妻を紀氏とし，小椋荘の木工・轆轤工の監理者として紀氏があたっていたことなどからその両者が結び付い

たと大和岩雄は考察している(30)。『古今集』の編者，紀貫之（868？～945？）は惟喬親王（844～897）と同時代人であり，また，その晩年は木工権頭に任じられていた。

奥美濃高賀山麓の山田家に伝わる「猿丸太夫の生家」との伝承は，轆轤師（木地師）や修験者がこの伝説を伝播したことを示すだけではなく，小野猿丸太夫や小野小町に仮託された漂泊移動民の中世的実像を伺える露頭ともいえよう。

従来の研究のように猿丸太夫や小野小町を物語文学の単なる唱導者・運搬者として扱うのではなく，修験者としての性格や轆轤師・石工・鍛冶師などの諸職民としてその実態を描き出すことが今後は必要であり，橋本鉄男の『漂泊の山民－木地屋の世界－』（1993　白水社刊）はまさにその試みの書であり，漂泊と定住という日本民俗の二元構造に漂泊生業者論として再考を促す一書となっている(31)。

四　漆器生産の展開と虚空蔵信仰

以上，轆轤・木工などの古代・中世における技術の伝授と秦氏の関係，木地屋の成立などについて概観してみたが，轆轤という高級な技術を持った秦氏→木地屋の関係は古く遡り得ても，虚空蔵信仰と漆工職との結び付きはそれほど古くは遡れないことが予想された。

ここで，漆工職人すべてに虚空蔵信仰が広がっているわけではないが，流布している場合，素地固めの一環として漆の下に塗り込める麻布などのことを「コクソ」（木屎，刻苧，黒塗，粉糞）という音通に説明を求めている。素地の表面を滑らかにして塗りを円滑にするためのもので，奈良時代の乾漆像の制作では抹香が用いられたが，一般的には挽物の際出た木粉を使う(32)。輪島塗では，木地→「こくそ」木地研ぎ→布着せ→布けずり→惣身→惣身みがき→一辺地塗→から研ぎ→中塗→拵物→小中塗→ふきあげ→上塗→加飾の工程をとる。輪島塗の特徴の一つはこの，「地の粉」「こくそ」と呼ばれる旧・土器殿（現・一本松公園）辺りで産出した一種の珪藻土を焼いて粉末にし，下地に塗用することにあり，これによって禿げない漆器生産が可能となり寛文年間（1661-72）にその特産地としての基盤を作ったとされる。また，輪島塗の伝播経路として紀州根来寺→石動山天平寺（本尊・虚空蔵菩薩）→輪島重蓮寺（嵯峨天皇の勅命により空海が一本松付近に建立と伝えられる）のルートが考えられており，（輪島漆器商工業協同組合『輪島漆器の由来と製造工程』），これらの寺は真言寺院であるだけでなく，虚空蔵信仰に関係する伝統を引いており，「こくそ」＝虚空蔵の単なる語呂合わせとは考えられないのである。

輪島の河井町では6月30日，7月1日の両日，“塗師祭り”を行い，輪島ろくろ師の元祖とされる惟喬親王を祀り，また，県社重蔵神社の神託によって発見されたといわれる漆器制作に欠かせぬ地の粉に対し謝恩する。かつては土器殿の黄土涸渇後の“地の粉”の発見地，小峰山に御仮屋をたて，神輿と供者がともに一夜を過ごした。キリコといわれる大燈籠を神輿に従え町内を回ったり，相撲などの催事が行われ，塗り職人は弟子同志が集まり内々で親方から祭酒をもらった。なお，輪島塗の漆器商人は重蔵神社の氏子であることを証明する木札を携行して諸国を行商した。また，鳳至町の住吉神社でも同様の“塗師祭り”が6月14，15日に行われていた(33)。

漆器は寺の荘厳や什器としの需要が多く寺院を中心に発達して来た。なかでも紀伊那珂郡の根来寺の漆器は正応元年（1288），高野山の僧徒が故あって多数来山し，寺用に僧徒自ら製造したのがその起源とされ，技術的には不熟練でありながらその形や色，堅牢さが特長とされた(34)。根来寺は新義真言宗の祖，覚鑁（1095-1143）が保延6年（1140），その晩年，難を避け高野山から移り，大伝法院の経営に尽くした伝統を継ぐ寺であり，覚鑁自身は虚空蔵求聞持法を若くして勤修し（保安3,4,1122,3年），その『立願文』に覚鑁の生涯に亘る一貫した求道の理想がみられるように虚空蔵菩薩に深く帰依していた(35)。天正13年（1585）には豊臣秀吉のため根来寺は灰燼に帰した。そのため，根来塗の技術は四散し，遠くは薩摩田代根来，奥州根来（正法寺椀），近くは吉野根来，京根来とその伝統が伝わった(36)。黒江塗で知られる根来に近い黒江（和歌山県海南市）でもその影響を受け，早くから塗師屋の間では「こくそ」祭りが行われ，漆器の守り神として虚空蔵菩薩を祀ってきたという(37)。吉野下市の漆器は吉野根来と称され，寛永年間に小倉屋喜兵衛により旧に復され，その後寛政年間に吉田屋重兵衛が塗師屋と結んで春慶塗りの技術なども取り入れ再興をはかったという。安政五年（1858）には「虚空蔵講」が結成され仲間規約を決め，競争の弊害を避けたという（『奈良県吉野郡史料』220頁）。

しかし，現在まで知られた史・資料では漆工職人と虚空蔵信仰を結ぶ線は江戸時代以前までは遡り得ない。現段階での結論めいたものを言うならば，虚空蔵信仰と漆工職人の関係は，木地屋の信仰を基盤にして，秦氏に関係ある京都法輪寺で近世初期頃に成立したのではないかとの推測にとどめておきたい。

その理由としては，秦氏と惟喬親王伝説との関係，木地屋から塗物師への業態の変化，また，法輪寺そのものが室町期に衰え慶長期に復興していること(38)，この信仰が虚空蔵菩薩をもってする著名寺院，それも法輪寺に近い関西地方の寺々で行われ，加えて，漆掻き，木地屋の人々の間には虚空蔵菩薩を職業祖神とする信仰はないからである。つまり，京都法輪寺が染織工芸技術を日本にもたらした秦氏との関連から，時代的にも塗物師的性格を強めていた木地屋に伝わる小野宮惟喬親王職祖譚にこれを結び付け，漆器生産と虚空蔵菩薩の因縁の浅からぬことを説き，祈禱寺院であるために寺経営とも関連して，流布したと考えられるのである。

近世以降は，漆掻きの出身地は限定されてくること，漆器の産地もまた固定してくることも(39)，寺院信仰としての漆工職祖神・虚空蔵菩薩を喧伝する条件の一つになっていったと思われる。法輪寺は現在でも，「十三参り」を始め，「電波祭り」（六月一日，エジソンの法輪寺境内の竹の利用に由来する），「原子の日」（十月二十六日，原核法師），「国土の日」，「貯蓄の日」（十月十七日）など虚空蔵菩薩に由来する利益信仰を醸成しており，古代における虚空蔵求聞持法道場以来の伝統がいきづいているとも言える。漆工職祖神の虚空蔵菩薩化も，こうした脈絡の中で再説強化されたものと考えられるのである。

職業集団の祭りが，その祭祀形態に特長を持つよりも，その祭神との結び付きに歴史性を持つことを漆工職祖神としての虚空蔵菩薩を素材に粗述してみた。例えば，製鉄集団を表すタタラという言葉が近世になって初見するのは，製鉄者という職能集団の時代的変化とともに彼等の奉ず

る金屋子神の性格の変化をも促したであろうことは想像に難くない。それは，一つには稲作農耕社会のリズムの生活への全面的な浸透であったろう。

職人の祭りには金屋子神が死忌を好み，血忌を極端に嫌うなど，祭りの背景にある忌観念などの相違も認められるが，近世以降，「職人」という言葉自体が都市の手工業者を主に指すようになり，仲間内を中心とした講的な祭りでは，同業者結束の求心的意味づけは持ちえても，生活の全体的な活性化にはほど遠いところにあったであろう。

虚空蔵菩薩の漆工職人の祖神化も近世都市の手工業者となった彼等がその必要から生み出していった一面をうかがわせるのである。

註

(1)網野善彦『日本中世の民衆像』1980 岩波書店，『日本中世の非農業民と天皇』1984 岩波書店

(2)井上鋭夫『一向一揆の研究』1968　吉川弘文館，『山の民・川の民－日本中世の生活と信仰－』1981　平凡社「鎌倉時代の奥山庄・荒川保で，非人と呼ばれたものは，実は「金掘り」を中心とする山の民であり，過重な労働や猪・熊・蛇その他の動物を蛋白給源とする食習慣などから，卑賤視されていたものである。こうした山間の賤民は日本列島に広汎に分布していたと考えられるが，同時に水路によって，金屋・鍛冶に，そして里人から海辺の海人に結びついていた。しかしかれらは，卑賤視されているために，仏菩薩の救いに恵まれることなく，太子信仰が心の支えであり，南都北嶺の系統の高僧たちの眼中に置かれることもなかった。親鸞が布教を開始し，また本願寺が浄土宗や真宗諸派に対抗して，本山としての性格を示しはじめたとき，まずその傘下に結集されたものは，これら太子の徒であった。」(138-139頁)

現在においても，高根地区など太子・阿弥陀石像が残る。井上が言及した後白河天皇の第三皇子，「雲上才一郎」の伝説は彼がカサヤス（離頭銛）で刺し殺されたために雲上公を祀る河内神社を鎮守とする集落では鮭漁にカサヤスを用いないなどの伝承として残っている。雲上公は木地屋における惟喬親王と同じく，ワタリ・タイシと呼ばれる河川運輸業の人々の職祖神的性格を持っていた。斎藤善一・佐久間惇一・佐野賢治編『朝日村の民俗』Ⅰ，Ⅱ，1977,1978 朝日村教育委員会「猿沢の虚空蔵」と雲上公の関係も次のように語られている。

「虚空蔵山　昔，十川の城主，雲上佐一郎が月夜の晩に二鷹山に登ると，北の方に光るものがあり，尋ねて行くと猿沢の四つ谷，楡下という所に庵があり，庵主の案内で山深く登ると，異人があらわれ，岩屋に案内した。そこには，木像があり異人は“これはもったいなくも聖武天皇の御代に行基菩薩が当山に登り，法華経千部，理趣品一万巻を誦読し，八方に敷きつらね，栃の大樹で一刀三拝し，大満虚空蔵を刻み，岩屋に納めたものなり”という。異人はさらに，阿弥陀，薬師，観音の三像を取り出し，佐一郎にさし出した。佐一郎は山上に御堂を建て岩屋の像を移し，麓に別当穀隠寺と十八所の庵をつくった。これが猿沢の大満虚空蔵様で，信者と猿沢の住民は今でも栃の木を焚かず，床板などにも使わない。」(『朝日村の民俗』Ⅱ414頁)

(3)谷川健一『青銅の神の足跡』1979　集英社

森納は盲人史の立場から鉱山師の職業病としての片目について医学の立場から失明原因を詳細に検討している。森納『日本盲人史考－視力障害者の歴史と伝承　金属と片眼神－』1993今井書店

(4)「左甚五郎」と虚空蔵菩薩の関係については『汎工芸』11巻9号誌上の次の記事が参考になる。

…甚五郎は飛騨の国に生まれ，父は大工であったが，甚五郎が鈍いので，家業を継がせることが不可能に思えた。そこで，父と共に虚空蔵法輪寺に参籠し，霊験を蒙ろうと考えた。甚五郎はその頃，龍を彫刻しようと考えていたが，実際の龍を見たことがないので，本尊に一百日の祈願をし，参籠した。満願の日夢に高僧が現われ，「汝の祈願は至って切なるものがあった。故に真の龍を空中に現わし見せる，明朝払暁の頃嵐山蔵王権現の谷間に至りて待つがよい。しかし，若し之を見るならば両眼忽ち其の明を失うであろう」と告げた。－中略－甚五郎は此の時，直ちに右眼を以って見ようとなし，左手にて左の眼を掩うた。爾来右の眼は遂に明を失い，左の眼を以ってなすに当り，左甚五郎と称すに至った。…明かに虚空蔵求聞持法を背景にした作為が認められる。

(5)宮城清一『虚空蔵さん』(一)(二)　1994　私家版

(6)中村雅俊「浜仏壇と虚空蔵信仰」『年報　木地屋とろくろ』3　1993

(7)河岡武春「吉野の漆かき」『民具論集』1　1969

(8)木地屋・木地師の研究は柳田国男「史料としての伝説」『史学』4-2大正14年（定本柳田国男集・第4巻）を嚆矢として，その江戸期の座的統制，初穂料の徴収原簿としての性格をもつ根本史料である『氏子狩（駈）帳』の分析から出発した。根元地の小椋谷の蛭谷（筒井八幡宮－筒井公文所・歸雲庵）側を主に杉本壽が（『木地師制度研究序説』1967ミネルヴァ書房　ほか），君ヶ畑（大皇器地祖神社－高松御所・金龍寺）側を橋本鉄男が（『木地屋の移住史　第一巻』1970民俗文化研究会　ほか）研究・紹介してきた。轆轤を使って木地物を挽いてきた職人を古代は「轆轤工」，中世では「轆轤師」と呼び，近世以降において杉本は「木地師」，橋本は「木地屋」という呼称を用いている。ここでは「木地屋」を用いるが，木地屋に関する研究書，民俗報告は数多い。その中でも，明治期になって定住化した木曽漆畑の記録（楯英雄『木曽谷の木地屋－第一集』1980　木曽文庫 1　私家版），木地屋と里人との交渉伝承を主に記した広川勝美編『木地師－聖なる山人－』〈民間伝承集成4〉1979　創世記は木地屋の実態をよく示している。また，文化財保護委員会編，無形の民俗資料記録として『木地師の習俗』1,2,3 1968,1969,1975があり，滋賀・三重，愛知・岐阜，新潟・石川の木地師・塗物師の民俗が技術伝承，人生儀礼などを含めて総合的に報告されている。

(9)須藤護「特集;越前漆器を訪ねる－越前大野の木地屋と河和田の塗師－」『あるく　みる　きく』228　1986，なお，河和田漆器の特長は柿渋を下地に用いる渋下地にある。この伝統は浄法寺（岩手），鳴子（宮城），川連（秋田），会津若松（福島），魚津（富山）山中（石川），黒江（和歌山），日野（滋賀）にもあり，柿渋製造と漆器制作の密接なことを示している。「特集;菓子の王者柿にきく－渋柿・甘柿・柿の渋－」『あるく　みる　きく』225 1985は食物としてだけではなく

柿の生活利用について詳しい。

⑽『胆沢町史』　民俗編1 1985　胆沢町史刊行会

⑾橋本鉄男「漆祖伝承覚書」『年報　木地屋とろくろ』2 1992

⑿鈴木岩弓「伯耆大山山麓の木地屋－鳥取県江府町下蚊屋」山村民俗の会編『杣と木地屋』1989 エンタプライズ

⒀杉本壽『木地師と木形子』　1981　翠楊社

⒁平野邦雄「秦氏の研究(1)(2)－その文明的特徴をめぐって－」『史学雑誌』70-3,4　1961

⒂橋本鉄男編『朽木村志』1974　朽木村教育委員会

木地師と焼畑民との関係について，宮本常一は「木地屋の定住した所にには焼畑が多く見かけられた。焼畑でつくるものはソバ・ヒエ・アワ・ダイズなどであり，決して上等の食物とはいい難かったが，木地挽きによる収入があったから生活は一応安定していたといえる。」（『山に生きる人びと　日本民衆史２』1964　未来社　95頁）としてその定住化過程で把え，藤田佳久は森林資源の利用という観点からその拮抗性を指摘し，西南日本から東北日本への木地師の移動は資源の枯渇に関係するとしている。藤田佳久『日本の山村』1981　地人書房「山村史からみた奥三河山村の地域構成－開郷伝承の村，入混り村，木地師の村，畑作村－」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』26 1981，同『奥三河山村の形成と林野』1992　名著出版など参照のこと。また，木地師の移動，定住の関係から松下智は茶栽培の展開を論じている。松下智「茶の伝播と木地師考」『愛知大学綜合郷土研究所紀要』28,29　1983,1984

⒃中川泉三編『近江愛知郡志』第一巻　1929　愛知郡教育会（1971　名著出版復刻）

⒄金達寿『日本の中の朝鮮文化』2 1972講談社

⒅平野邦雄，前掲注⒁及び『帰化人と古代国家』1993　吉川弘文館

⒆平野邦雄，前掲注⒁⒅

⒇直木孝次郎「秦氏と大蔵」『秦氏研究』14,1982，後に『日本古代国家の成立』1987　社会思想社に所収

㉑木工寮の性格については，長山泰孝「木工寮の一考察」『古代国家の形成と展開』1976　吉川弘文館　参照

㉒橋本鉄男『木地屋の民俗』1982　岩崎美術社

㉓橋本鉄男「姓の小椋について」『年報　木地屋とろくろ』1 1991

㉔大島建彦「奥美濃の猿丸太夫伝説(1)(2)」『西郊民俗』86,87　1979

㉕小林一蓁「唱導説話縁起としての高賀山縁起」『行動と文化』10 1986

また，高光の出家を藤原氏の荘園経済と比叡山の繁栄との相互関係から平林盛徳は論じて，時代背景がわかる。平林盛徳「『多武峯少将物語』にみる高光出家の周辺」『言語と文芸』5-5 1963（『聖と説話の史的研究』1981　吉川弘文館所収）

㉖船戸政一「藤原高光と虚空蔵菩薩」『中日新聞』昭和46年８月22日夕刊

㉗都丸十九一「赤城・榛名・妙義の山岳伝承」『修験道の伝承文化』（山岳宗教史研究叢書16）

『神道集』（平凡社・東洋文庫94）では，高光中将の名は高野辺大将家成の姫君である赤城大明神の妹・伊香保姫の夫として登場し，時の国司と戦い死に遺骨が水沢寺（現在の伊香保町水沢，坂東33札所第16番）に祀られたという。中将の姫君は若伊香保大明神となった。また，小野猿丸は赤城沼の龍神・俺佐羅摩女にその音通から比定されている。

一方，赤城と日光の神の戦いでは小野猿麻呂は日光神に味方し，蜈蚣に化けた赤城神を矢で射止め日光神に味方している。（林羅山『二荒山神伝』）

なお，赤城三所明神は『神道集』「上野国赤城山三所明神内覚満大菩薩事」では，①大沼－赤城御前－赤城明神－本地・千手観音　②小沼－高野辺大将－小沼明神－本地・虚空蔵菩薩　③山頂－覚満大菩薩－本地・地蔵菩薩　となっている。

(28)杉原丈夫『越前若狭の伝説』1970　松見文庫

(29)橋本鉄男『漂泊の山民－木地屋の世界－』1993　白水社

(30)大和岩雄『秦氏の研究』1993　大和書房の「近江の秦氏をめぐって」の節参照

(31)本書において，橋本は木地屋と穴太衆（石工・石垣師，蛭谷では轆轤師の元服式の折り，“阿野定盛にて候”と名乗りしたという），金山師，黒鍬，近江商人，製薬・売薬業（筒井根源丹）など他業種との関係を論じ，未分化の中世的諸職としての木地屋像を描き出している。奥美濃の木地屋はキワダで「ダラニスケ」という胃腸薬を作っており，製薬・売薬と木地屋との関係は深い。氏子狩の折りに，「大岩助左衛門願人にて，土産にあいすといふくろ薬を神酒にて粘り，筒井根源丹と銘を書，是を持参しける。此の丹ハ東白庵の調合也。後代に持参したるハ，大覚寺来乗坊の制方なり。」（『大岩日記』天正4，1576年の条）と見えることから，「あいす」という黒薬を携行したことを橋本は紹介している。マタギの村として有名な新潟県岩船郡朝日村三面はじめ，「あいす」と称した秘伝薬が各地に伝わる。米沢藩の典医佐藤成祐（1762-1848）は上杉鷹山の命を受け三面に薬草を求めた。「愛州」は米沢の竹俣，高野家，飯豊町広河原の高橋家に家伝薬として伝わっている。（『米沢市史』941-2頁　1944）橋本の示した木地屋の複合的漂泊生業構造の研究は今後ますます重要性を増すであろう。

また，従来，照葉樹林文化論の中で論議されることの多かった漆，木地屋の問題も，実際の木地屋の活躍の地はその素材からブナ・トチを主とするブナ帯地方であり，轆轤の形式と植生帯が関係するなど植物生態学方面からする研究も重要となる。中川重年「特集;森林と人間－樹木の語る世界」『あるく　みる　きく』203　1984，同「木地屋の世界－その移動と森林の変化－」『ブナ帯文化』1985　思索社　所収　中川は樹木の方言から木地屋の移動を論じ，ブナ林の分布と木地屋集落の分布が相関すること，移動を促した契機として近世の漆器産業の発達があったことなどを指摘している。

(32)漆工の歴史，技術，作品などについては沢口悟一『日本漆工の研究』1966　美術出版社参照，漆については松田権六『うるしの話』1964　岩波書店，伊藤清三『日本の漆』1979　東京文庫出版部，漆器・漆職人については山岸寿治『漆職人歳時記』1981　日本漆工協会，同『漆ぬりもの風土記　東・西日本編』1985　雄山閣出版，漆職人のライフ・ヒストリーについては竹内

康平「奥本留次郎－漆器職人－」『都市の民俗・金沢』1984　国書刊行会などを参照のこと。
輪島塗を総観したものとして，張間喜一・古今伸一郎『輪島漆器』1976　北国出版社
(33)杉本壽「輪島ろくろ師の習俗」『木地師の習俗』3 1974　文化庁文化財保護部
(34)田中敬忠「紀州の根来塗」『紀州今昔－和歌山県の歴史と民俗』1979　田中敬忠先生頌寿記念会
(35)白井優子『空海伝説の形成と高野山』1986　同成社
(36)黒川真頼著・前田泰次校訂『増訂　工芸志料』1975　平凡社（東洋文庫254）
(37)冷水清一『海南漆器史』1975　光琳社　黒江漆器は室町初期に紀州の木地師によって創始されたとしている。また，杉本壽は黒江漆器は根来塗の影響よりむしろ，室町期に近江日野の木地師・塗師の手によって成立したとしている。『木地師制度の研究』第一巻　1974　清文堂出版「紀州黒江漆器の沿革」の節参照のこと。
(38)薗田香融「嵯峨虚空蔵略縁起－ある密教寺院に関する覚書－」『関西大学文学論集』5-1,2 1956
(39)半田市太郎『近世漆器工業の研究』1970　吉川弘文館

新刊紹介

下野敏見著

『日本列島の比較民俗学』

民俗学は比較研究法をもって日本民族の成立と発展の過程を明らかにし，未来を展望する学と，民俗学の危機など意にせぬ強い確信を持つ著者が列島の民俗文化を主に民具方面から論じたのが本書である。運搬具を主とした個別民具を素材に，周圏論（伝播，新旧関係論）と重出立証法（復元論，発展過程論）を駆使して分析し，列島の民俗文化をアイヌ，東・西ヤマト，琉球の四文化圏に分け，その文化史的意義を探る。沖縄，南西諸島の研究に比し，ほとんど言及されてこなかったアイヌの民俗文化をも含めて，物質文化を中心としながらも日本の民俗文化を相対的に論じた本書は地域民俗誌を日本文化論に展開する上でも，個別民具の位置付けをする際にも今後避けては通れない論を提示している。

第一部は背負い運搬具について，東日本の背負い梯子，西日本の二本縄の発生を運搬法とも絡めて論じ，シケニ系，ニナワ・セイタ系，タガラ系，ティル・テゴ系，カタゲウマ系の五系統に分類し，その系統と展開を明らかにしている。第二部では馬具，樹皮文化と竹文化，ザルと箕の事例研究から馬の渡来などを論じ，第三部では技術・言語・信仰伝承方面に素材を求め，潜水漁，土偶とワラ人形と大王どん，田芋・薩摩芋と箆，沖縄の霊信仰，韓国の堂山信仰と日本の聖地との民俗比較を各章で試みている。

そこでは，著者自身による現地調査の多数の資料はもとより，各地の資料館・博物館資料が有効に使われ，このような研究の背景に，民具研究や博物館の充実が伺われる。学会のおりの博物館参観などで，熱心に展示品のメモを取り，寸暇を惜しんで学芸員に説明を求めている著者の姿を何度も目にしている。民具研究の牽引車でもある著者が物質文化研究の方法と課題を自ら具体的に示し，民具研究を一歩前進させた一書ともいえる。ともかく，南西諸島から，日本列島，東アジアへと四十年にわたる著者のミクロからマクロにわたる比較の視点が日本民族文化論として結実したのが本書といえる。

（佐野　賢治）

A5判　340頁　索引10頁　吉川弘文館
1994. 5刊　8,961円